翻刻

新体詩歌

竹内隆信編輯

第一集

新体詩歌序

古人云フ蛙モ亦歌仲間ナリト善哉言ヤ夫レ人喜悲哀樂ノ心ニ感スル者アレバ則チ必ス之ヲ其口ニ發ス其發スルヤ流暢音律アル皆歌ナリ彼ノ詩三百篇亦只口ニ發スル所兒童モ謠ヒ婦女モ和ス何ソ別ニ謂ハレアランヤ西洋諸國ノ詩ニ於ケル亦然リ其平常用フル所ノ語ヲ以テ其心ニ感スル所ヲ述ベ而シテ之ヲ歌フ耳我國ト雖モ往古ニ在テハ其平常用ル所ノ詞ヲ以テ歌ヲ作リシナリ今時ニ至テハ則チ然ラス詩ヲ作レハ漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レハ古語ヲ用ヒ苟モ平常用ル所ノ言語ノ其中ニ在ル有レバ俚俗鄙ム可シトナシテ而ノ之ヲ採ラズ遂ニ今日ノ歌ナル者ハ學者社會ニノミ行ハレ而ノ其他ニ至テハ容易ニ之ヲ知ル能ハサルニ至

ル豈ニ謬見ト云ハサルベケンヤ蓋シ國ノ次第ニ開明ニ趣クニ從ヒ交通ノ日々ニ繁劇ナルヨリ各地ノ言語ハ各地ノ事物ト同シク其内國ニ混入シ漸ク平常人ノ用フル所トナル即チ之ヲ其國ノ言語トシテ差支ナキ筈也詩ニモ歌ニモ用ヒテ妨ナキ理ナリ然ルニ彼ノ謬見者流ハ開明ノ運轉スル所以ヲ知ラズ苟モ歌ト云ヘハ古言ヨリ外ハ用フル事ノ成ラヌ樣ニ云ヒナセリ此ノ如ンバ事實ニ於テ不都合ヲ生スル事モ少カラサルベシ假令ヘバものゝふの弓矢ト云フ可キモ今時ハ「スナイドル」ヲ擔フ事ナレバものゝふの「スナイドル」ト云ヒタリトテ差支ナキ筈ナリ而ルモ是非ニ弓矢云ハネバナラヌトスルハ事實ニ於テ不都合ナラズヤ之ハ是レ「スナイドル」ト云フ詞已ニ國言トナリシヲ解セサルノ謬也若シ夫レ古言雅言ヲ以テ長歌短歌ヲ並ブルモソノ平生ニ用ヒサルノ言語ナレバ殆ド外國語ヲ以テ歌ヲ作ルノ思有テ十分ニ己ガ情懷ヲ寫シ出スヲ得サルノ憾ナキ能ハズ古語ハ古代ノ通言ナリ今言ハ今代ノ通言ナリ古人ハ古ノ語ヲ以テ作ル今人ハ今ノ語ヲ以テ作ル何ノ妨カ之アラン然ルヲ故ラニ小六ケ敷古書抔ヲ捻クルハ實ニ笑フ可キノ至リナラスヤ余此説ヲ持スル事久シ頃者竹内君新体詩歌ノ編アリト余ニ其序ヲ請ハル余夙ニ茲ニ志アリ故ニ樂而ノ之ヲ言フ明治十五年新橋僑居ニ於テ

屈山小室弘毅

緒言

一此編數首泰西之名家シェーキピーヤ氏之原撰而我邦洋學家之係于翻譯

一誠忠遺訓外二三首者我國固有之長歌也

一又長歌中撰者姓名等屬于漫然者有一二首今不暇撿正讀者幸諒之

一此編不言古今体詩歌言新体者新体以居其八九也亦不言詩撰而言詩歌者在彼言篇在我言歌其理同也觀者莫爲異以焉

一編中僅々評語其不附者他日爲有所請諸先輩

明治十五年八月

嶺谷竹内節識

新体詩歌第一集

目次

○楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓之歌
○直實敦盛を追ふの歌
○月照の入水を悼みて讀める歌
○舞曲に擬して作る歌
○自由の歌
○顯理四世（ヘンリ）を讀める
○ハムレット
○玉の緒の歌
○拔刀隊
○花月の歌

○ウルゼー
○大佛に詣で〻感あり
以上十二篇

新体詩歌

小室屈山校閲
竹内節編輯

○楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌

建武の昔し正成は。肌の守りを取出し
是は一歳(ひとせ)都攻めの有りし時。下し給ひし綸旨なり
之を汝に與ふるなり。余は兎に角になるならば
世は尊氏の世となりて。叡慮を惱し奉らんは
鏡にかけて見るが如し。さは去り乍ら正行よ
父の子ならば流石にも。忠義の道は兼て知る
弓張月の影暗く。家名を汚すこと勿れ
打洩されし郎黨を。あはれみ扶助し隱家の
吉野の山の奥深く。月の桂は漣(さざなみ)や
流れも清き菊水の。旗を再び飜へし

敵を千里に逐ひ退けて。叡慮を安んじ奉れ
嗚呼叡慮を安んじ奉れ

○熊谷直實曉に敦盛を追ふの歌

抑も熊谷直實は。征夷將軍頼朝公の御内に
關東一の旗頭。智勇兼備の大將と
世にも知られし勇士なり。左れば元歴元年の頃
源平須磨の戰ひに。功名ありし物語り
聞くも中々あはれなり。その時平家の武者一騎
沖なる船に後れしと。駒を浪間に打入れて
一丁許り進みしを。扇を揚げて呼び戻し
互にしのぎを削りしが。見れば二八の御顔に
花も粧ふ薄化粧。涅齒黑々と附け給ひ

斯るやさしき打扮に。君は如何なる御方ぞ
名乘り給へとありければ。下より御聲爽かに
我こそは參議經盛の三男。無官の大夫敦盛ぞ
早々首をうたれよと。西に向ひて手を合せ
流石にたけき熊谷も。我が子の事まで思ひやり
落つる涙はとゝまらず。鎧の袖に絞りつゝ
是非なく大刀振り揚げて。南無阿彌陀佛の聲諸共に
首は前にと落ちにける。無殘や花の蕚さへ
須磨の嵐に散りにけり。之を菩提の種として
永々跡を弔ひ申さんと。御なき體に言ひ遺こし
青葉の笛を取添へて。八島の陣へ送りしは
實になさけある武夫の。心の中ぞあはれなり

その身は遂に。蓮生法師と名のりつつ
都に登り元祖大師を師と頼み。剃髪禪衣の身となりて
晝夜念佛怠らず目出度往生し給ひけり

○月照僧の入水をいたみて讀める歌　平野次郎國臣作

花の都も秋は猶。夕ふべ淋しき風情なり
名は流れたる清水や。落ち來る瀧の乙羽山
秋の葉色の溝ことに。散るや紅葉のちり〳〵と
亂れゆく世の浪花江や。蘆のあはりは繁くとも
猶世のために身をつくし。盡くさんとても筑紫潟
波影の岸の波ならぬ。操をいつか深緑
色は替らぬ青柳の。驛路を越て香椎潟

たゝの橋を打ち渡り。千代の松原千代かけて
萬代かけて君が世の。千ト歳の松によそへつゝ
神に歩みを箱崎の。社にかけし四ッ文字の
筆の主をよく問へば。延喜の帝畏しこくも
御手をば下しませりつゝ。爰もむかしは石疊み
重ね〳〵し白浪の。よせし昔し忘れじと
恨み浦半の片襷。かけて歎くも憐れなり
沾衣塚の沾衣。吾か身に着たる心地せり
やがて博多の假住居。ここも浪風さわがしく
又行く方は薩摩潟。沖の小島にあらねども
心細くも都にて。誰かあはれと思ふらん
たよるは心筑紫潟。一人の外に打あけて

語ふ人も浮き枕ら。波路へだてゝ野間の關屋の關守にせき
とめられて又舟に
乘るも夫と寄あだに。波にゆられて行く先は
黒の瀨戸てふ名もうしや。頓て鹿兒島かごの島
つばさ縮めて潛みしが。又木枯の風とおどろきて
日向を指して船出せし。日は神無月望の夜の
傾く月と諸共に。照りかがやきてくもりなき
身は大君の爲にとて。爰に一人の薩摩潟
いかなる緣にし前の世に。契も深き船の沖
底の藻屑となりぬるを。乘合人も船人も
櫂の雫も露程も。さりとは知らぬ白浪の
立ちさわげども甲斐ぞなき。猶東雲の明け鴉
なくより外はなかりけり

○舞曲に擬して作る　久坂國武作

世はかり菰と亂れつゝ。赤根さす日もいとくらく
蟬の小川にきりたちて。隔ての雲となりにけり
うら傷ましや玉きつる。內裡に朝暮とのつせし
實美朝臣に季朝卿。壬任澤四條東久世
其外錦小路殿。今うき草の定めなく
旅にしあれは駒さへも。進み兼てそいをりつゝ
降しく雨の絶間なく。涙に袖は濡はてゝ
是より海山淺茅原。露霜わけてあしかする
浪花の浦にたく鹽の。からき浮世はものかばと
行かんとすれば東山。峯の秋風身にしみて

朝な夕なに聞なれし。妙法院の鐘の音は
なへて今宵はあはれなり。何時しか暗き雲霧を
はらひ盡して百敷の。都の月をしめ給らん

小室屈山

○自由の歌

天には自由の鬼となり。地には自由の人たらん
自由よ自由やよ自由。汝と我れがその中は
天地自然の約束ぞ。千代も八千代も末かけて
此世のあらん限りまで。二人が中の約束を
いかにぞ仇に破るべき。さはさりながら世の中は
月に村雲花に風。まゝにならぬは人の身ぞ
話せば長い事ながら。古し羅馬の國と聞く
その人民を自由にし。共和の政治を立てんため
數多の人のうき苦勞。それをも知らで欲のため
我權勢を張らんとて。再ひ帝位に昇らんと
企てたりしセサルは。その親友の手にかゝり
議員の中に殺されたり。その親友のいふことに
民を奴隷になさんより。寧ろセサルを殺さばや
我の羅馬を愛するは。親友よりも甚し
羅馬の民の望みなら。我身も茲に諸共に
捨る命はいと易し。佛蘭西國のルイス帝
自由を壓制なさんとて。種々に手段を廻せど
邪道はいかに正道に。打ちかつことのあるべきぞ
民のいかりは火の如く。又洪水の溢れ來て
岩をも碎く勢ひに。いと畏くも帝王の

黄金をかざす冠は。斷頭機械の上に落ち
あはれはかなくなりけるは。誰を怨みん壓制の
自業自得といふべけれ。英吉利國の革命も
同じ車の一ッ轍。昨日の王は今日の賊
コロンウエルが手に持ちし。自由の旗の招きには
天をも回らす計りにて。チャーレス王を誅戮し
自由の基を立てたりき。北亞米利加の合衆國
もと英國の民なれど。其發端をたづぬれば
自由の人となりたさに。故郷の名殘に氣も止めず
深山荆蘇はまだ愚か。人のふみてし事もなき
あを海原を打ち渡り。見も知りもせぬ亞米利加へ
殖民なせし心根は。いかにあはれに思ふらめ

然るに猶も英吉利の。はだしの綱は離られず
暴君汚吏の壓制に。詰り詰りて國の爲め
義兵を擧ぐるときくからに。我後れじと親も子も
死ぬる覺悟で七年の。長の月日の攻め守り
遂に敵をば追ひ拂ひ。目出度立てし獨立國
ワシントンの名に負へる。都と共に榮へゆく
國のほまれや勇ましゝ。嗚呼彼と云ひこれと云ひ
自由の爲には昔より。幾多の人の生き別れ
又死にわかれするものを。我東洋の人ぢやとて
土地にかはりはあるなれど。などか心に變るべき
人の自由といふものは。天地自然の道なるぞ
つとめよ勵め諸びとよ。卑屈の民と云はるゝな

余此文をかきをはる。時しも春の夢枕
眠りをさます鐘の音の。いともさやかに聞へける

外山正一　譯

〇ヘンリー四世

ヘンリー四世その初ランカストルの「ヂウク」たり一旦謀反企てゝ。六万人の將としてリチャルド王と戰ひて。王と俘になしたれば自から立て王となり。四方に逆威を震るひしも皇天いかで亂臣を。安穩にして置くべきや禍亂交も起り立ち戰爭止む時更になくウエルス人は蜂起せりスコット人は責め入れりヘルセー一家叛逆す。王を暗殺謀るものその數いとも多かりき。議員の權理を打ち守り王に烈しく抵抗す財政最とも困難し王は人望失ひて。健康漸く衰へてその晩年に至りては。自から悔ゆるその惡事心で心責められて。安眠とては片時もなす事ならぬ苦しさよ。此一篇にこれぞ是れその有樣をうつしたる。シェキスピールの名作ぞ廣き世界のその中に。王者の數は多けれどヘンリ四世ならざるば。幾人ありや聞まほし

いと下賤なる我人の。枕を高く高いびき
今しも睡るその數は。幾千万もあるならん
嗚呼うらやまし羨し。眠るの神よ眠り神
天より我に賜りて。伽するとこそ云ふべけれ
如何なる罪のたゝりにや。眠の神に見はなされ
たとへ暫時の間だりとも。胸のくるしさ忘れたく
まぶたを閉て眠らんと。いかにすれども眠られず
そも如何なれば眠神。見る影もなきあばら家の

くすぼりかへる藁の床。むさくるしきもいとはずに
心地もよげに横はり。枕のほとりバタ〳〵と
飛び來る虫の羽音さへ。眠りを誘ふ助
すや〳〵眠るものなるに。伽羅枕香をたきたて〻
床の上なる天蓋は。金襴緞子もて作り
眠を誘ふ樂の音は。いと心地よく聞ゆなる
貴人高位の閨までは。何と來ることのなき
げに愚かなる神ぞかし。何故に斯く見苦るしき
不潔な床に横はる。下賤なものと寐はするも
王者の床に來らぬぞ。金の時計と號鐘と
比べの者にはならぬのを。はていぶかしき神の意ぞ
ゆら〳〵ゆる〻帆柱の。高き上にも安くねる

水夫の目をば閉さして。なさけ用捨も荒浪や
吹き來る嵐凄じく。うづまく浪をまきあげて
天地とどろく浪音は。死人もさむる程なるに
下は無間の地獄なる。高き柱のその上で
浪にゆらめき眠らずる。神の力ぞ不思議なる
惣身水にひたされて。身を粉にくだく水夫には
かくさはかしき其折も。眠るの神は付き添ふに
草木も眠る丑滿時。眠を誘ふそのエ夫
手を替へ品をかゆるとも。王者の側に來らぬは
依怙贔負なる神にこそ。あ〻幸多き賤が身は
寢ろやねむれや羨し。つら〳〵思ひ合すれば
冠り着たる頭ほど。苦しきものは世にあらじ

○ハムレット

井上哲次郎　譯

ながらふべきか但し又。ながらふべきに非るか
爰が思案のしどころぞ。運命いかに拙きも
これに堪へるがまさらをか。又さはらで海よりも
深き遺恨に手向ふて。之をはらすがものゝふか
どふも心に落かぬる。投ても死なんか死ぬるのは
眠ると同じ眠る間は。心痛のみが肉体の
あらゆるうきめ打捨つ。是ぞ望のはてならん
ア、しぬねむるねむる時。若しも夢みる事あらば
ハアこだわりがあるやうぢや。なせと云ふに死にねむり
無常の風にさそはれて。此娑婆はなれしもふとも
如何なる夢の來るやら。ハテ疑ひの晴れぬもの
うき事長く忍ぶのも。これが爲かなゝせなれば
九寸五分さもちたれば。其切先きで一トつきに
事をすますもやすけれど。之をば爲さず慎みて
強者の非道世のそしり。驕れる人のはづかしめ
思ふ美人の不深切。緩みすぎたる國の法
貴人の無禮又たとへ。下人とならば善とても
輕しめらるゝ之を是れ。堪へ忍ぶのは何故ぞ
重荷を負ひて汗流し。うい目つらひ目こらへつゝ
暮らせぬくらし暮らすのも。亦何故ぞ是はみな
死後のおそれが有るからぢや。死出の山路の不思議なる
登てかへる人そなき。如何なる事のあるやらん
物すごくこそ思はるれ。たとへ此世に止まりて

うき艱難をなむるとも。あの世の事はおそろしや

○井上巽軒曰。畏死之情述得精妙。

かくと心に思ふ故。たけき心の弱くなり
如何なる深き大望も。花をひらかず枯うせて
實のなることぞなかりける。左はさりながらオヒリヤよ
アヽたをやかなその風情。そなたは神を禱るなら
わしが罪障わびてたへ

○玉の緒の歌

井上哲次郎　譯

眠る心はしぬるなり。見ゆる形はおぼろなり
あすをも知らぬ我命。あはれはかなき夢ぞかし
などゝあはれにいふは惡し。我命こそまことなれ
我命こそたしかなれ。墓はおはりの場所ならず

人は塵にて又散ると。いふはかからたの上のこと
人の願ひは喜びか。人のねがひは悲みか
人の願はこれならず。唯怠らず働きて
今日よりまさる明日をまて。業は久しく時は馳す
強き胸だも亦たへず。鼓の如く打ちつづけ
一日〳〵近くなる死出の旅をば速すなるあらそひ多き世の
中に
此身をよせてさきがけに。なりてます〳〵進むべし
言なき啞となるなかれ。牽るゝ牛となる勿れ
如何に未來は樂しきも。いかに空しき過去なるも
ともにこれをば捨て置きて。われを忘れず神をしり
はたらくべきは今日ばかり。すぐれたる人世に多し

我れとても人相同じ。勉めはげめば斯くならん
ゆめ怠らず務めなば。長く殘さん此名をば
海より荒き世の中に。舟失ひて浪の間に
獨り漂ふ我友は。我名をきゝて勇まなん
我名をきゝて進まなん
さすれば人は氣を張りて。事業ばかりに心して
如何なる運も事とせず。高きに至れ馳せゆけよ
たのしみあるぞ働けよ
○弘云詞句精巧押韻自在敬服々々

外山正一　作

○拔刀隊

我は官軍我が敵は。天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たるものは。古今無双の英雄で
之に從ふつはものは。ともに慓悍決死の士
鬼神にはぢぬ勇あるも。天の許さぬ叛逆を
起せしものは昔より。榮へしためしのあらざるぞ
敵の亡ぶる夫までは。進めやすゝめ諸共に
玉ちる劒ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし
皇國の風ともの〻ふの。其身を護る露の
維新このかたすたれたる。日本刀の今更に
又世にいづる身のほまれ。敵も身方も諸共に
刃の下に死すべきぞ。大和だましいあるものは
死べき時は今なるぞ。人におくれて恥かくな
敵の亡ぶる夫までは。すゝめや進めもろともに
玉ちる劒ぬき連て。死ぬる覺悟で進むべし

前を望めば劒なり。右も左も皆劒
つるぎの山に登るのは。未來のことと聞つるに
此世に於てまのあたり。劒の山に登るのも
我身のなせる罪業を。ほろぼすために非ずして
賊を征伐するがため。劒の山も何のその
敵の亡ぶる夫までは。進めや進め諸共に
玉ちる劒ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし
劍の光りひらめくは。雲間に見ゆる稻妻ぞ
四方に打出す砲聲は。天にとどろく雷ぞ
敵の刃に伏すものや。丸に碎けて玉の緒の
絶へてはかなく死する身の。屍は積て山をなし
其血は流れて川をなす。死地に入るのも君の爲め

敵の亡ぶる夫までは。進めや進め諸共に
玉ちる劒ぬきつれて。死ぬる覺悟ですゝむべし
彈丸雨飛の間にも。二ッなき身をおしまづに
進む我身は野嵐に。吹かれて消る白露の
はかなき最後とぐるとも。忠義の爲めに死ぬる身の
死して甲斐ある者なれば。死ぬるも更に怨みなし
我と思はん人達は。一歩も後へ引く勿れ
敵の亡ぶる夫までは。進めや進め諸共に
玉ちる劒ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし
我今爰に死ぬるのは。君のためなり國の爲
捨つべきものは命なり。たとひ屍は朽るとも
忠義のためにすてし身の。名は芳はしく後の世に

永く傳へて殘るらん。武士と生れた甲斐もなく
義もなき犬と云はるゝな。卑怯な者とそしられな
敵の亡ぶる夫までは。進めや進め諸共に
玉ちる劒つきつれて。死ぬる覺悟で進むべし

小室弘作

○花月の歌

月と花とは昔より。誰が樂まぬ人やある
たがよろこばぬ人やある。さはさりながら月花も
心につれてうきことの。種となれるも多からん
足柄山の風すごく。松風にそう簫の音も
これより遠く奥州へ。いくさといへば身の末は
死ぬか生るか白河の。關をば雲や隔つらん
勿來の關の春のくれ。駒をとどめて眺むれば
都の空は花ぐもり。鎧の袖に散かゝる
櫻の雪は將軍の。鬢の霜より尙白し
戟の枕に夜は慣れて。秋のあはれも知らざれど
越山の月のいと白く。雲間を渡る鴈が音も
故郷の空にかへるぞと。思へば我もなつかしゝ
花の都はあれはてゝ。何處が我身のおきどころ
今宵一夜の宿頼む。櫻の露に袖ぬれて
滅亡爰にきはまりて。平家の末そ悲しけれ
佞人ばらの讒により。諫めの言葉容れられず
二りともなき賢臣は。筑紫の浦のわびずまゐ
御衣を拜して涙なる。心の底は如何ならん
我君今は賊のため。遠き島ぢに行玉ふ

無念の心やるせなく。十字をしるす櫻の木
我が赤心を申さんに。抔か多言を要すべき
月の光や花の香や。幾萬年を經るとても
更にかはりはなきなるに。常なきものは世の治亂
月を見て醉ひ花を見て。睡れる春の手枕の
只一場の夢の間に。うつる興廢存亡の
世のなり行ぞ無常なれ。若しも世運の拙なくて
上には君を煩はし。下には民に苦勞はせ
國の亂るゝその時は。月の光はかがやくも
花の色香はにほふとも。なぐたのしみのあるべきぞ
されば世間の諸びとよ。今よりまごゝろ引起し
國の光を東海の。月よりも尙輝かし
國のほまれをみよしのゝ。花よりも尙芳ばしく
するこそ今のつとめなり。誓て斯もなせし後
樂しき月をして見たや。樂しき花見をして見たや

○ウルゼー　山仙士

おさらばさらばいざさらば。再び會はぬ暇乞ひ
榮譽に長く別るべし。人の習は皆都て
利運の端の芽出しなば。八重に花咲き花盛り
位に位重りて。榮耀榮華を極むれば
愚ない胸に思ふ樣。運命强く望みかない
天にも登る龍なりと。悅びいさむをろかさよ
冬やゝ深く置く霜の。情け用捨も荒野原
根までを枯す霜枯に。運極はまりて身の墮落

見るもあはれな有様は。我が今日の身の上ぞ
永の年月心なく。名譽の海に浮べるは
板子を頼みうかゝと。游ぐ童子に異らず
丈の立たざる淵に入り。飽まで強き我が意地も
堪へおふせず張り裂けて。勞れはてたる精身に
忠を盡して年寄れる。其の甲斐もなく今ははや
身の零落に涙川。水屑とこそは成るべけれ
浮世の虚飾の譽れ程。忌むべきものはあらずかし
今に至りて我か胸に。初めて悟る所あり
廣き世界の其内で。王者の機嫌取り取りに
此世を渡る男ほど。憐むべきはなきぞかし
願ふ所は其笑顔。恐るゝ所は其不興

彼と是との氣がねして。憂さ恐怖さの數々は
軍するより尚ほ多し。女子の機嫌取るに增す
遂に零落する時は。天より落るルシフアなり
再び浮ぶ瀨はあらず

評曰字々悲壯巧摸寫寵臣末路之眞境身無才藝徒恃君寵以弄威福者足以爲誡矣

尚今居士

○鎌倉の大佛に詣でゝ感あり

今を去ること數ふれば。六百年のそのむかし
建長のころは鎌倉に。稻多野の局のたてられし
總青堂に大佛は。御身の丈けも五丈にて
相好いとゝ圓滿し。見者無厭の尊容は
何れの地にも比類なし。さるに明應四年とや

由井のつなみの難により。大殿破壞の其後は
紫磨金仙も雨にぬれ。風に曝されたまふこと
殆と爰に四百年。こはこれ人に聞くところ
余も此頃鎌倉の。古跡たづねておちこちと
杖をひきつゝ大佛に。詣でゝ心おちつけて
しかと尊顏見あぐれば。はちすの花もおよびなき
淨き如來の御心は。外にあらはれ何となく
涅槃てふ語の思はれて。凡夫不覺の余とても
しばしの間胸の雲。はれて無明の夢は醒め
眞如の月の圓かなる。影を見たるにあらねども
見たるが如き心地せり。夫れ物事のなりたちは
頓にとゝのふことぞなき。むかし羅馬の帝國は

シーザルひとり智をふるひ。起りしものにあらずかし
德川氏の繁昌は。家康ひとり德ありて
成りしものとな思ひそよ。時勢人情やうやくに
はこびて此に至りてき。鎌倉山の大佛も
浮屠氏の敎わたり來て。千百年余を過ぎし後
人の信仰厚くなり。鑄物の術も具はりて
初めてなりしものならん。稻多野局の時代には
此大佛に打向ひ。精神こめて手を合せ
天下泰平安穩と。わが後生とを禱れども
今の明治の聖代に。生れし人は然はせず
佛の面をうち眺め。むかしのことを思ひやり
そのゐもの師の巧みなる。わざを譽むるの外はなし

かはれば變る時勢かな。秋の空にも劣るまじ
昔の人の是となせし。事も今では非とぞなる
今日のまことは明日のうそ。あすの教はあさつての
非理邪道とやなるならん。天地萬物一定の
規律によりて進化すと。學者はいへど是を之れ
しかと心に認めたる。人は果してなかるらん
嗚呼盛なる大佛よ。六百年もたつた川
からくれないのもみぢ葉と。流るゝ水を年々に
人の譽ることならず。尊体こゝに在ます間は
如何に時勢のかはるとも。年々人の尋ね來て
歎賞せざることなけん

新体詩歌第壹集　畢

明治十七年四月廿三日飜刻御届
同　年五月出版　（定價金八錢）

編輯兼原版主　和歌山縣平民　竹内隆信

飜刻人　山梨縣平民　内藤傳右衛門
西山梨郡常盤町四番地